
スノー・ガーデン

藤春 由貴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スノー・ガーデン

【Nコード】

N3190S

【作者名】

藤春 由貴

【あらすじ】

『スノー・ガーデンの聖域』

それは神話と共に語りつがれる、一つの御伽話であった。この世界には存在するはずもない『冬』。しかし、『スノー・ガーデンの聖域』にだけ、『冬』は存在するのだという。

誰もがただの御伽話と笑う中、2人の少女が聖域を探し求め、大陸を旅するというお話。

片方は失った同族を再び甦らせる為に。片方は冒険家であった父親の願いを叶える為に。

果たして、2人の信じる通り『スノー・ガーデンの聖域』は存在
するのか…？

序章 聖域から

見渡す限りの銀世界であった。それは今はなき『冬』という季節が造り出す『雪』という細かな氷の塊であるらしい。ふわふわと宙を舞う純白の『雪』。

しかし、そこには花々が咲き乱れていた。一面の銀世界に、一面の花畑。気温は高く、春のように温かい。温かいのに『雪』が降る。それは、私にとって信じられない光景であった。いや、この世界に住む誰もが信じられないような光景であろう。この世界に『冬』はない。

太古の昔、神々はこの世界に『四季』を創ったらしい。

すべての始まりであり、『春』を司るメレーシャ族の神メルスイアーノ。『夏』を司り、人々に活気を与えたとされる、ニール族の神ニーリア。『秋』を司り、豊穣を与えたとされるセタ族の神セタラクト。そして、『冬』を司り、人々に死をもたらしたとされるレジェ族の神レジフィアラス。

しかし人は『死』を恐れ、『冬』を嫌った。

その結果、レジフィアラスは嘆き、『冬』とともに姿を消したという。そしてレジフィアラスを信仰していた部族のレジェ族は、やがて神の加護を失い徐々にその数を減らしていった。

現在、このグレーブ大陸に、レジェ族は存在しないとされている。

そう…彼らは滅んだのだ。その身に宿ったとされる退魔の魔術と

共に。

序章 聖域から（後書き）

のんびりと更新する予定です（笑）

感想等、できればよろしくお願いしますっ！

第1話 それぞれの現在

深い森の中を、一人の少女が歩いていた。見た目の年齢は十代後半ほど。腰元まである長い銀髪に、灰色の大きな瞳を持った美しい少女だが、その服装は少し変わっている。古風な茶色のワンピースに紺色のローブ。まるで古代の魔術師のような出で立ちだが、その腰には細身の長剣を携えていた。

主に銃器を扱う者が多いこの大陸では大変珍しい『剣士』だ。少女の銀髪をそよ風が揺らしながら通り過ぎて行く。

「ここ、ね…」

少女は目の前の小さな神殿を見つめて呟いた。大分古いものなのか、壁の装飾は所々が崩れ、屋根が完全に落ちてしまっている部屋もある。崩れかけた壁には蔓化の植物が張り付き、葉を茂らせていた。

少女がおもむろに剣を抜く。辺りには鳥のさえずりや木の葉がざわめく音しか聞こえない。しかし少女は、まるで『何か』を警戒するように利き足を半歩引き、剣をかまえた。

一瞬の沈黙…そして次の瞬間！

「……っ！」

キンッ！ と、甲高い音をたてて少女の剣が、自らに襲いかかってきた『何か』を弾き返した。初撃に失敗した『何か』は唸り声をあげながら少女にその姿を晒す。

『何か』は、一言で言えば、まるで巨大なトカゲのような姿だった。鋭く細められた鋭利な赤眼は獲物を狙う肉食獣のように少女を見つめ、長く恐ろしい爪は獲物を引き裂く瞬間を待ちわびるように鈍く輝いている。

しかし少女はそんなトカゲの姿に臆するでもなく、銀髪を翻しながら一気に距離をつめた。細身の剣が、まるで銀色の光のように凄まじい速さで動き、トカゲに迫る。

銀光、一閃。

トカゲは軽やかな身のこなしでそれを大きな跳躍で避ける。しかし少女はそれを予測したように、振るった剣をそのまま返し、空中の為回避しようのないトカゲを一気に叩き斬った。

「魔族デアル我ヲ斬ツタ!? ナンダ、ソノ剣ハッ!!」

かすれた低い声がトカゲの魔族から発せられる。少女は答えず、もう一度容赦なく剣を一閃したが、魔族はそれを転がるように避けて叫んだ。

「マサカ貴様…レジェ族!？」

「…そうよ。」

ダンツと少女が大きく跳躍し、剣を下向きに構えながら魔族に向かって全体重をのせて振り下ろす。

「マダ生キ残リガイタナンテ…ギイヤアアアッ!!」

魔族の言葉の後半は恐ろしい断末魔の叫びに変わる。その叫び声は森中に響きわたり、近くにいた小鳥は慌てて逃げに行った。少女は魔族の亡骸から血で黒く染まった剣を引き抜くと、左右に振って血をはらい手持ちの布で軽く拭き取ってから静かに鞘へおさめた。

「…私は、一族最後のレジェ族、フィーリュ・ルヴァイエ。」

魔族の亡骸に向かって、フィーリュは平淡な声音でそう告げる。それからゆっくりと瞳を閉じて言った。

「貴方達魔族を滅ぼす者よ。」



「たっだいまあゝ…」

とある酒場の扉が力なく開かれて、一人の小さな少女が入ってきた。歳の頃は十代前半ほど。淡い桜色のくせ毛は頭の高い位置で二

つに結ばれ、少女が動く度に可愛らしく揺れている。

少女はそのまま当然のようにカウンター席の一番奥に座ると、ため息をつきながら脱力したようにテーブルにつっぷした。カウンターの向こう側に立つ、この店の主人である恰幅のいい女性は苦笑しながらコトン、と不思議な色の飲み物が入ったグラスをつっぷした少女の横に置く。

「またデマの噂に振り回されたのかい？」

「うん…」

くぐもった唸り声は肯定の意だ。主人は、やれやれといった風に肩を小さく上下させると少女の細い肩に優しく手置いた。

「そんなに気を落とすんじゃないよ、ラーチェ。」

ラーチェと呼ばれたその少女は、勢いよく体を起こしてひったくするようにグラスを手にとって一気に飲み干し、グラスが割れんばかりの勢いでテーブルに叩きつけるようにして置いた。そして、声の限りに叫ぶ。

「もうコレで何回目よおッ!!?」

まるで酔っ払いだ。幸い、ラーチェの座るカウンター席には他の客はおらず、彼女の叫び声に驚いて

自分のグラスの中身をぶちまけるような者はいなかったが。余談だが、ラーチェが一気飲みした飲み物はアルコールの類ではなく彼女お気に入りこの店の主人メリアのオリジナルジュースだ。

「まあまあ、ラーチェ、荒れない荒れない。丁度、奥のテーブル席に北から帰ってきた奴等がいるよ。行って話でも聞いておいで。」

「うん…行ってきまあす…」

ラーチェはフラフラと立ち上がって店の奥にあるテーブル席へと向かう。メリアはため息をついて微笑すると、ラーチェのグラスをさげた。

奥のテーブルには3人の男性が集まっていた。そのうちの1人は、ラーチェがよく知っている人物だ。

「オルードさん久しぶりっ！」

「おっ、ラーチェじゃねえか！」

ラーチェが明るく声をかけると、がっしりとした体つきの男性が振り返った。彼がオルードである。

オルードはラーチェの亡き父親の友達で、この『メリアの酒場』を拠点とした活動をしている冒険家だ。

「なんだ？ また＜聖域＞の情報集めか？」

「はい、わかったことあります？」

「残念だが＜聖域＞についての情報はねえなあ…」

「そう、ですか…」

あからさまに肩を落とすラーチェ。彼女達の言う＜聖域＞とは、＜スノー・ガーデンの聖域＞。

昔話などに登場する、不思議な場所だ。この世界には存在しないはずの『冬』がつくりだす『雪』。

その『雪』に覆われた場所が、この大陸にはあるはずなのだ。冒険者達はそれを求め、大陸中を旅する。それが＜スノー・ガーデンの聖域＞。

落ち込んだ様子のラーチェに、オルードはニヤリと笑って言葉を続ける。

「でもよお、ちょっとばかり面白い話がある。聞くか？」

「どーせだから聞きます…」

ラーチェは素直に答える。オルードは2人の仲間達に了解を得てから話始めた。

「北に行った時、不思議な女がいてな。確か…フィーリュつつたかな？ 変わった名だろ？ そいつが俺らに、お前と同じように＜聖域＞について聞いたきたんだよ。」

「へえ、異種族の方ですか？」

ラーチェが興味を持ったのか、身を乗り出す。

「多分な。んで、俺達がわかんねえって答えたら、『そうですか。ではやはり…』とかなんとか呟いて行っちゃまったんだが…なんか知ってそうな雰囲気だったぞ？　どうだ、行くか？」

オルードはいたずらっぽく微笑んでラーチェに問うた。ラーチェは大きく頷いて元気よく叫ぶ。

「北のどこですかっ！？　もう行きますっ！！」

そんな彼女に、オルードは「そこねえとな！」と言って豪快に笑うと、ラーチェに地図を差し出した。

「印がつけてある。行って来い、ラーチェ。」

ラーチェはそれに飛びついて握りしめると、荷物片手について先ほど入ってきたばかりの

扉にむかって駆け出した。そして扉の目の前で急停止すると、オルード達に向かって満面の笑顔で手を振った。

「ありがとオルードさんっ！　行ってきますっ！！」

「おうよっ！」

ラーチェは勢いよく扉を開くと、外へ飛び出して行った。期待に胸躍らせながら、彼女はまだ見ぬ北の地へと向かう！

第1話 それぞれの現在（後書き）

この先、2人は出会います。

目的は同じくスノー・ガーデンの聖域です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3190s/>

スノー・ガーデン

2011年10月8日23時24分発行